



針葉樹會報

通卷 第五十三號

地藏峠・鹿澤鳥居峠

孫

信越線田中驛に降りたスキーヤーは一行四名（手塚兄弟と其友人）の他に十人餘り、菅平行の連中と較べたら雲泥の相違である。自動車の關係で赤の他人一名を加えて五名、凍てついた田舎道を横堰へさばす。どうやら雪はある。横堰の茶屋で簡単な朝飯を済まして愈々退屈な二里の登りにかかる。手塚君は同行の弟を「コナシテヤル」と稱して「こゝから峠まで絶対に休まさないぞ」と宣言して先發させる。（彼は言葉通りを實行したので、ヤング手塚は可愛相に峠に間近い處で相當にグロツキイになつた）。ダラ／＼登りであるが、暮の廿三日に降つたきりといふ雪道は相當に凍てついて頗る足懸が悪い。五十番茶屋あたりから次第に雪量を増し（といつても精々十糎位）どうやらスキーは乗れるらしいが峠まで擔ぐことにする。地圖の湯ノ丸山中腹の道はダラ／＼登りの上に雪も大分多いし、最初の宣言通り無休憩の行進なので、ヤ

ング手塚が悲鳴をあげて時々立止ると兄貴が後から「歩いて／＼」

と縁日の巡査の様に怒鳴る。何しろ御歳十九歳と三十歳とでは斷然兄貴の威令物凄くテンデ御話にならぬ。が行程は頗るはかどり横堰から約一時間四十分で峠に着く。期待して居た湯ノ丸山も籠登山も雪が少く岩がむき出しになつて居て登行は不適當らしい、峠の鹿澤側の牧場の柵内がゲレンデになつてゐるので午前中はこゝでスツテンボーゲンや尻マークを試みる。話ほど寒くはないし、又夫程の粉雪でもなかつたが相當に滑つた。こゝでもヤング手塚は兄貴から

「俺が野澤でやつた様に杖無し直滑降をやれ」

と嚴命され一生懸命である。

午後二時出發、三方峰登行を決行する。例によつてヤング手塚はシール無し（但繩を用ひた）で、後から兄貴に叱られ／＼後滑に悩みながら登る。雪は段々深く、頂上直下の森林帯の入口では一米位となり、良好な粉雪となつてきたが、時刻と一行の行進力を考へるとこれ以上の登高は無理と判斷したので惜しくも此地點から引返す。防火線の切開に面した斜面を降つたが、可成の傾斜の上にカラ松の雜木が背の高さ位に一面に出てゐるので、一行ばかりでなく三方歸りの他のパーティも簾制動、顔面制動に忙がい。降りきつて四時、峠の小屋に歸つた。こゝから鹿澤へは一瀉千里の降りだが、案の定、道は先發の連中にテラ／＼に滑り固められてゐるので思ひがけないスピードが出る上に、中途から下の方

は崖沿に結つた柵に相當に惱まされた。

紅葉館に泊る。(もう歸つたと思つた大阪の岡田君は實はまだ泊つて居て牛鍋をもてあましたといふもつたない話を其後大阪で聞いた) 食後ビール二本をやつてみたが、寒いせいかチツトも利かなかつた。室の中でも手拭が凍る處を見ると成程鹿澤は噂に違はず寒い處、従つて雪はいゝが如何にも妙い。

翌朝は、手塚君達一行は草津へ、私は鳥居峠から菅平口へと向ふといふので、此冬から通る様になつた省營バスの連絡の評定に手間取り午前十一時出發。幸ひ前の晩新雪(約十糎)があつたので途中二、三ヶ所泥スキの處もあつたが新鹿澤までスキーに乗れた。ゲレンデの入口で手塚兄弟に分れる。こゝへ来るまでもヤング手塚は相當にコナサレ通してある。新鹿澤のゲレンデは前夜の新雪が無かつたら恐らく、スケートが出来たらう。ローンスキーかと思ふ程草の出で居る處さへある。會社の連中が十二、三人「讀賣」の催で來て居る筈だが晝食時で一人も見當らない。直滑降は相當なスピードが出た。あんまり調子に乗つて、ついクラストに乗り上げ、恰度芝浦のリンクで轉んだ様に五間ばかり流された。二時過ぎ、を切り上げ鳥居峠に向ふ。恰度古長井の一寸峠寄りで縣道に出るツアールートがあるのでそこを行く。登りにワックスが利かず、荷はあるし、愈々終列車斷念かなと思つた。ゲレンデから五十分で縣道に出た。出て驚いた事にははるか向の峠まであるか無しかの登りが長蛇の如く續いてゐる。登りきつて又平坦路が七、八丁、これには完全に腐つた。峠で正四時。五分休

む。四時十五分には澁澤から眞田行の省營バスが出るので、十分でさばせるだらうと、さび出したが、峠道は例によつて九十九折、スピードは恰度私に快適だが、道程は却て長く、到々澁澤の二、三丁手前でバスに發車されてしまつた。此邊まで來るさもう細い砂利が顔を出してゐるのでヒツコリーが惜しく、ぬいで裏を見るとシマツタ、もう可成やられてゐる。もう履くまいと擔いで歩き出したが如何にも遅い。我慢して二、三丁歩くうちに砂利も大分少くなつてきたので思ひ切つてスキーをつける。走り出すと、時々ガリ／＼、スーツと石の上を通るらしい。ハラ／＼しながらも何とかして菅平口發のバスに間に合せたい意地で滑る。此のガリ／＼、スーツを大分續けて漸く菅平口に來ると、果してバスは正に空車を群る乗客の方へ旋廻しつゝある處だ。澁澤の二の舞ではスキーに申譯なしと、持前の地聲を張り上げて

「オーイ、バス待て！」

と怒鳴つた。至誠天に通じて、バス―臨時電車―最終列車とリレーは美事に成つたが、芳賀が精魂込めて作つた彼のスキーは悲しや完全にサ、ラスキーになつてしまつた。

註、だから雪の少い地方の、えたいの知れない峠道は、決して佳いスキーを履いてはならない。雪はあるにはあつたが、朝からバスやハイヤーが可成通つて、恰度轍の所は雪の下から角の鋭い、細い石がのぞいて居たので強引の罰は顔面にきたのであつた。

鹿澤へ行く様になつたのは、暮に大阪へ行つた時、中島、

太田、岡田の三君と會食した折、岡田君は

「正月には兄貴と一緒に鹿澤へ行きます」と云ひ、中島君は「僕は三菱の連中と新鹿澤へ行きます」

と云つたのに心を引かれたので、鹿澤は未知の處なので、行く氣になつたのである。

冷池の小屋まで

ク マ

后立山々脈といふと僕等が學生時代には何さなく邊僻な這り悪い厄介なそして憶却な山々を感じてゐたものであつたが近頃は交通の便がよくなり、それにも増して重要地點に小屋が出来たりして實に親しみ易くなつた。一と昔前を思ふと實際隔世の感がある。十一月に小谷部、鷹野などのガツチリした所について行つて貰つた白馬行にすつかり味を占めて、十二月末から一月にかけてベシ、木、卓（小生の義弟）の三人と今度は鹿島槍へ行く事になつた。肝心の目的は達しなかつたが、その他の都合は洵に具合よく行つて何等の事故もなく歸京出来たのは何よりの事であつた。松本に着いたら旨い具合に助、タカにとつつかまつて夜行で歸らうなんて不心得な豫定はいつの間にか消し飛ばされて、その足ぢやない自動車で淺間へ登り、助の他の三人は夜中に隣座敷の異様な物音に惱まされつゝ夜を明かしたといふナンセンスまで御土産にして三日の夕方新宿驛に辿りついた。

黒澤峠は地圖の感じからいふと一直線に鹿島河原まで降り相に

見えるが雪の少なかつた爲めか餘り面白い滑降は出来なかつた。でも峠の頂上から猫岳の方を見た感じや鹿島川の斜面から見上げた鹿島槍、爺、アラ澤の頭などの白壁の眺めは實にいいと思つた。

鹿島河原から冷澤の小屋（之は二股の小屋とも西俣の小屋ともいふらしい）までは二時間はかゝらない。小屋は二階建てで三十人位なら悠りだろう。猿倉の小屋を心持ち大きくしたものだと思へば間違ひはない。小冷澤を左に見て暫く左岸を登り右側に渡り又左岸に渡りかへすと右手に白い壁が樹林の上に見える。小屋はその下邊りだつた。

小屋から西俣（長ザク）の出合までは五分位、西俣は下の方が暫く間狭くて急であるが藪をぬけて一度廣くなると迎も素晴らしいゲレンデとなる。然し雪崩の危険は充分ある。十一月から四月までの登山者は餘程氣を付けて貰ひ度い。出たら最後逃げるなんて事は絶対に出来ない。廣くなつた所でも傾斜は相當なものだ。赤岩尾根を右に見、左に爺の絶壁を仰ぎながら登つて行く。國境尾根に出る所が一番狭くて急で雪でもなかつたら相當緊張する所だろう。無理をすれば頂上までスキーをはけるがそれより擔いだ方が早いので私達は五、六間下でスキーを脱いだ。

雪庇をかいいてヒョット頭を出すに俄然ものすごい景色が展開する。剣だ。立山だ。岩小屋澤岳が馬鹿に立派に見える。布引、鹿島の双峰、はては黒部への谷々、雪に埋れた静寂境、小窓や三窓邊りのキュツ／＼とそ／＼り上つて行く剣の岩峰は、その鋭い線は實に何ともいえず人を惹きつける。

黒部側の斜面を斜滑降で東の鞍部に下り一寸上つた處に煙突のついた小屋が冷池の小屋である。小屋番の居ない事は下の小屋で聞いてゐるので豫め用意はして行つたもの、何さなく薄氣味悪い思ひがした。話はこうである。

十二月の十五六日頃、經營者荒井重永は息子と人夫(といつても十七八歳の者)を連れて下の小屋から自分の小屋へ登つて行つた。それ以來消息がなかつた。里で夫君がタントもうけて歸へるのを楽しみにしてゐた妻君や娘は便りはなくとも當然山の上でお客を相手に暮してゐるものと許り思つてゐた。所が私達の登る二日許り前に大毎の竹節君の一行が登つて此の小屋に泊ろうとしたのに、パンフレットまで出してゐる小屋がガランで人の這入つた氣配もない。之は變ださ早速下の小屋の主人に報告に及びそれから急に行衛不明だといふ事がわかつて里へ知らせたりしたのだつた。色々の事情を綜合し結局長ザクを登つてゐる最中に突如雪崩に出遭はしそのまゝ三人とも埋つて了つてゐるのだといふ事になつた。助さんの話やその他の情報からしても餘り此の重永といふ男は評判がよくない、然しそれはそれとして兎に角氣の毒な事には違ひない。此の遭難からしても長ザクの冬期登攀は餘程注意する必要がある。二俣小屋の主人によく聞いて出るもよし、一寸したワボ一の常識位は持つてゐた方がいゝと思ふ。

恁んな譯で小屋代はお志だけで済ませたが歸りの長ザク降りも心配なので一夜泊つたゞけで下山して了つた。登りはいゝ、天氣でよかつたが歸りはドンドン雪が降つて來て切角のいゝ斜面も半分

位興味をそがれて了つた。

ペンは二俣の小屋へ泊つて遠見へ行くといふが私は何さなく歸り度くなつたので、小屋に寄り少し許り休んでそのまゝ鹿島へ向つた。大冷澤の出合から鹿島の部落までの林道は實に氣持ちがよかつた。はじめゾームの赤をぬつた爲め新雪がくつついて閉口したがアザラシをつける事によつて此の御難から開放され、スイ／＼と降りしきる雪の夜道を唐松の林の中を懷中電燈に照らされ乍ら進んで行つた事は忘れ難い思ひ出となつた。

鹿島からは馬橋を出して貰つたが普通の馬力の車がないだけなのだから寒い事／＼、一番前に腰かけた木さんはすっかり凍つて了つたらしい。小熊ヶ原を過ぎる頃、中天に朧な月がかゝるのを見た。涯しない雪の曠野、私は何だか滿洲の野を思ひ出してゐた。大野に這入る手前で馬ひきの親父が右手の村里に光る一つの電燈を指して——あれが冷池の重永の家ですよ——と教へて呉れた。思ひなしか障子にうつる電燈の影がチラ／＼と揺り動いてその光だけが何か悲しいものをつゝんでゐるかの様に思へるのであつた。

(二一、二一九)

遠見小屋

ペン

○遠見小屋は一、四二〇米、遠見尾根、所屬神城村、下川又寛と「山日記」に書いてある。大町の地圖で小遠見山から半里許り東北に池の印のある所は一、六五〇米位ある。私の行つた時は

雪が降つてゐて四邊が何も見えなかつたからこの池の近所なのかもつと下なのかハッキリ分らなかつた。道は神城から西に夏道を辿つて谷が細くなりかけた所から道から左の相當急な斜面をジグザクに登る。好い加減草臥れた時分に少し平な尾根に出て四五町行くと小屋の五十米位下へ出た様に覺えてゐる。

○一月三日午後一時神城村の又寛氏の宅で休んで小屋までどれ位ですと聞いたら四時間位かゝるでせうと云つた。五時頃になるさうす暗くなるし、こんな雪の降つてゐる時だから嫌だなあと思つたものゝ急いでシールをつけて行く。三十分許りで高ヶ入スキー場。驛より五町とあるが倍以上はある様な氣がする。急斜面を大急ぎで登つて尾根に出て小屋に着いたら三時半だつた。一日雪がチラついてゐた。

四日。昨晚の中に雪が二尺許り積つた。まだ天氣が悪いので十時、膝位もぐる新雪の中を下る。一時間ばかりで高ヶ入スキー場。此處で炬燵にあたつて二時半の汽車に乗る。結局小屋まで軽くはなつたが荷を背負ひ上げてそれから上は一步も登らず下りて來たことになる。でも私はこんな平凡な旅でも面白かつたと満足してゐる。

○小屋は二階建、昨年建つたのだから新しい。部屋は大小取交ぜて五つ。關西學院が幾分出資してゐるので一番大きな部屋に頑張つてゐる。一人の僕はその隣の六疊に外の人と八人で入つた。隣の部屋でゲルマン族が何かの侵略する時とかの勇敢な歌をやつたり、鹿島鎗バットレスで落ちた話、何處かの遭難搜

索談などやつてゐるのでボンヤリ寝ながら聞いてゝも面白かつた。この小屋に來てゐる人は數から云へば關西の人が多い。白馬、後立山方面は割に關西の人が澤山來る様だ。

○鹿島の部落は平村に屬する。平家の落武者が來た所と云ふ。カクネ里がその最後の據り所で此處にかくれてゐて毎日遠見山に登つては敵や來ると望んでゐた。遠見山からの眺望も好いがその名前も是から來たのだと云ふ話を山の人達がストーブを圍んでやつてゐた。横から遠見はそれならば高見と書くべきで普通トオミは峠の語原で——と六敷しいことを云ひ出したのはホラ全の噂に高い秩父の全教和尚だつた。

○小屋から小遠見、天狗岳を越えて鹿島川の造林小屋まで行くつもりだつたのが日程の都合でよしてしまつた。泊り合せた人夫に聞いたらまだ行つた人がないから時間は分りませんと答へた。山から見た様子では今年の正月位の雪ならば四時間位あれば行けそうな氣がする。麓に桃や櫻の咲こうと云ふ三四月頃、春の長閑な陽に照らされて鹿島鎗を右に見てノンビリ此の尾根を滑つて見度いと思つて居る。

嚴冬の北岳バットレス登攀

パーティー——小谷部・小林・鷹野

十二月七日。晴。甲府—杖立峠—五葉小舎。

八日。小雨後晴。小舎—野呂川シレイ澤岩小舎。

// 九日。晴。岩小舎—廣河原—御池小舎。

// 十日。雪。最低零下十一度。ラッセル及び氷壁のステツプ
カッティンク。

// 十一日。霧雪疾風。零下。14 C。第五のガリー完登、及び
第三へのトラヴァース工作。

// 十二日。晴烈風零下十六度。休養。

// 十三日。晴—零下十八度。第三のリツヂ完登。

// 十四日。曇雪—零下十六度。鷹野が落したビツケルを拾ひ
に氷壁登攀。小林は痔が悪く休養。

// 十五日。晴後吹雪—零下十五度。白根御池小舎—鳳凰越え
—北御室。

ラッセルで苦しみ意外に時間を喰つた。

// 十六日。晴—零下十六度。北御室—葦崎。

(一)

小谷部全助

北岳バットレスの最困難ルートたる第三の積雪期登攀。恐らく私達としてこれ程全力をかけ用意周到に行つたものは無いと思ふ。六月、第三リツヂの初登攀に成功して以來、その冬期に於ける可能性を認めて、専ら研究を続け十月の荷揚げ偵察等に大童であつた。扱、實際行くことになると何や彼にやで荷物は凄いい位多かつたが、三人よく頑張つて思出懐かしい御池の小舎へ落付く事が出来た。今度の成功は天候や豊富な食糧等のお蔭であるが、パーティーの體

力が揃つて好かつた事が非常に影響したのではないかと思ふ。

最初の日には三人で岩壁下迄ラッセル。クラストが固い上に中が深いので仲々骨が折れる。大樺澤の本流や各ルンゼからは一次雪崩のデブリが所々に認められた。こゝから仰ぐ岩壁、殊に3や4は逆層に冰雪の鎧をつけてまるで人間なんかの登り得る所とは思はれぬ。第五のガリーはあまりにも立派な氷壁に化して居るのに全く驚いて了つた。壯大な岩壁を流れ落ちる秋の雪溶け水が凍り重つて出来たのである。秋來た時には急でホルドの無い此處は不可能で左のリツヂへ逃げた所だ。この厚い氷壁を利用して登攀を決心。新しい爲か山内のビツケルは氣持よく切れる。ガツチリとアイスハーケンを利かせつゝテラ／＼の氷に慎重なバランスを保つて一つ々々丹念にカッティンク。氷塊がバラ／＼と下で確保する友の頭を亂打して落ちる。大きい奴は随分痛いらしいので手心して切る。さう／＼三十米程で一段落ついて一寸したアンカレツヂ着。これから上は氷も一、二寸位になりハーケンが利かぬので左手の急な草付混りの溝を固く凍つた地肌にはハーケンをぶち込んでのし上る。一寸した氷の斜面をビツケルとアイゼンのツアツケを極度に利かせて頑張るさもう雪溪で安全だ。随分時間を食つたが、それよりも一人で彫刻を續けた私の腕はすっかり凝つて了つた。この日の仕事は之でおしまひとして戻る。岩角等全くないのでハーケン二本を露岩に無理してアブザイレンでする／＼と氷壁を下りた。

更に第三へのトラヴァース工作に就いて一言したい。私は秋の

偵察からどうしても喰違つた二段のバンドに依らねばならぬ事を覺悟して居たが、雪や氷を被つた逆層の岩盤は果してこれが安全なバンドだつたのか全然わからなくなつたので大體そうらしい所の雪面へカッティングを始めた。傾斜は六、七十度もあり足下は直ちに例の氷壁へ逆落したので手前の岩へガッチリとハーケンを打つて小林に完全なジッヘルを頼んだ。カッティングして見ると案外雪は薄く、直ちに薄氷で被れた岩へガッチリとつき當る。だがアイゼンを利かせてどうやらこの雪の終點迄行く。ハーケンから二十米位。それから五、六米直下のバンドに移られ、ば好いがこれが問題なのだ。先づ突當つた岩肌へハーケンを試みる。映畫『白き王者』では随分工合よくハーケンを打つて居るが實際さなるさう簡單にはゆかぬ。あちこち強引にたゝいたがいけない。一度はうまく這入つたのでザイルを通し試しに力を入れてみたらボツクリと一尺四方大の岩が割れてあつさり抜けて了ふ。實にこゝ一本のハーケンにトラヴァースの成否がかゝつて居るのだ。私は泣き出した氣持になつたがもう一頑張りど努力し、漸く無理な溝だつたが、やけにハンマーを振ふとまるで飴の様に曲り乍らそれでもビツ／＼とかん高い音をたて、がつちりと這入つて行く。遂に成功だ。もう之に補助綱さへ垂らせば好いのだ。

實際この逆層は全然ホルド乃至ピンを提供して呉れず全くハーケンに依らねばならなかつた事は、穂高附近の岩（積雪期に於る）と非常に異つた技術を必要とした。かくして遂に待望の第三リツヂ登攀に成功したのであるが、之は鷹野が書く。尙第五の登

攀は小林が受持つ筈。（一九三六・一・廿一・記）

（二）第五ガリーに就いて

小林重吉

北岳バットレスの中で、此の第五ルートと云ふのは第四のマツチ箱のリツヂの左側を鋭く切り込んで釣尾根の上部に達してゐる可なり大きなガリーである。

夏期の登攀としては、此のルートは最早一九二九年の七月に京都帝大のパーティに依り成功されたものであるが、冬期に於ては今まで全然手掛られなかつた。

今年の秋、村尾氏と望月と私の三人のパーティで第四を登つた時、第四から眺めた状態によると、ガリーの中は薄い氷が張り、ホルドは所々埋まり、嚴冬期の困難さを豫想させるに充分だつた。然し上部に行くに従ひ、傾斜が緩くなつて見えたので、之なら何とかは成るだらうと云ふ自信はあつた。只積雪の状態に依り雪崩の危険は可なりあるとは思つたけれど。

登攀

十二月の十一日、前日に第五ガリーの五十米餘りの氷壁には立派な階段が出来上つたし、又其處へザイルをたらしめて置いたから今日こそ天氣さへ良ければ、第四から第三へ、とトラバースして待望の第三をやつてしまはうと思つてゐた。

所が、午前一時に起床の積りが、午前三時に成つてしまつたので、これは少し時間的に無理かも知れぬと思つた。然し大急ぎで

パンで朝飯を済まして、鷹野が體の調子が悪いと云ふので、小谷部と二人で小舎からアイゼンをつけて出發した。時間は既に四時四十五分に成つてゐた。

前日にラッセルしてあるので、長衛岩小舎を経て、岩壁の直下までは案外樂で、第五の直下へ着いた時は、七時五分で、正にモルゲンロートの輝きが、北岳の上半部に輝き始め、上の雪溪はキラ／＼と暖かさうに光り出した頃だつた。然し我々の居る日蔭は猛烈に寒い。

一休みするや、直ちに例の氷壁に取りついた。このガリーの氷壁は實際見事である。

此の氷壁を約三十米登ると、やゝ平な第一のアンカレッツチへ出る。此處はガリーの丁度真中で、足もとを見ると、テラ／＼の氷壁が大樺澤へ落ち込んでゐるので、餘り氣持良くない、此處で、八時二十分から三十五分まで休んだ。

次のピツチは約二十米程で、左寄をステップを切つて登つた。この上部は、草付の凍つた可なり厭な所がある。こゝで小谷部が一本アイスハーケンを使い、後から自分が抜いて登つた。此の上のテラスは相當廣く、日當りも良いので氣持好い處だ。

此處へ九時三十分頃着き、それから第四へトラバースすべく約一時間程苦心した。結局此の日はロックハーケン二本を打つて第四へ完全にトラバース出来る自信が附いた。

然し此の時、すでに天候は惡化の徴を見せ、軽い雪片が風と共に舞い始め、雪雲はどん／＼廣がるので、この日第三をやるのは

無理と諦め、第五を完成してしまはうと決心した。

それから遮二無二第五の急な雪溪をつめ、このガリーの最上部に突き當つた。そこは下から見ると、バットレス特有の逆層の岩壁ではあるが、何かホールドもあり、又左側の樂なリツチへ出られさうにも見えたので、アタックして見たが、その惡さには驚いた。

最後の今一息と云ふ處で、どうしても乗切れず、ピトン一本を捨石にして、アブザイレンで、下の雪溪まで撃退されたのである。此の時はリュックをザイルで下ろしたり、補助綱を使つたり、全く眞剣だつた。

此の下の雪溪から左へトラバースすると割に樂なリツチに出られる。京都帝大のパーティがA點と稱するのは、之より可なり下から左側のリツチに移つた、一つのアンカレッツチらしい。少くとも吾々の第二のテラスよりは上である。

此のリツチへ出たのが午後二時近く、それよりは腰までもぐるやうなラッセルに惱まされ、夏期ならば、何でもないうやうな岩場でも手こずつて、豫想外に時間を喰ひ、又疲れた。右へ右へと頂上を目指して、北岳の直ぐ左側の尾根へ出たのが、五時頃である。

尾根へ出るや否や、途端に猛烈な西北風に見舞はれ、殆んど息もつまるやうだつた。それでもよろめきながら北岳頂上に立つたのが午後五時十五分、それから三十米位の疾風の中を大樺澤の落口までたどりつき、小谷部と二人ではつとした。

折から、回復した天候に恵まれ、月明を利用して大樺澤を下り、

大樺池の小舎に歸着したのは七時四十五分であつた。

(三) 第三尾根登攀

鷹野雄一

小舎の前から眺めると、北岳の側面を限る稜線の手前に、そして頂上に近くぐんと急角度にもり上つて見るから見事なスカイラインを描いてゐるバットレスの No.3。あのリツヂに、そしてあのガリーに、力一杯とつゝいて男一匹生命をかけての登高を試み様と謂ふ其の日は、明日になるか明後日になるか。私は其の日が一日も早く来て欲しいと思ふ期待の氣持と、何時までもくく來ない方がいゝと願ふ様な弱い不安な心との、入り交つた云ひ知れぬ複雑な心地になつて行く自分をどうする事も出来ないものであつた。なごやかな冬の日さしの午後、つらゝをしたゝる雪の音に耳を傾けながら此の御池の小舎へ入つて以來、氷壁の登攀に、No.5の登高に、もう三日と云ふ日が流れ四日目の今日も高い空をさうくく吹く風の音と共に暮れて行かうとする。

「愈々明日だれ」

私達はお互ひにそんな氣持になつた。そしてキスリングに、ザイルやハーケン、食糧などをほうり込んで、十六夜の月の昇る頃シユラフザツクにもぐり込んだ。梢にうなる風の音は聞くだに寒むくしい思ひがする。山の彼方の遠い都の街々では、今頃師走の人出に賑はつてゐる事であらう、此の同じ地球の上にもそんな世界もあるのだらうか、さういふかしい心地にさへなつて來る。愈々明

日は登高なのだ。でも十三日の金曜日ぢやなかつたかしら。斯んな事を思つてゐる中何時かぐつすり寝込んでしまつたのであつた。

寢坊の私が、二人の友に起されたのは二時を少し許り廻つてゐる頃だつたらう。仕度は大體出來てゐるので、ゆつくりと火を起して、ゆら／＼と動く裸蠟燭の燈で食事をさる。成功すれば今夜は此處で乾杯しやう。でも若しかしたら、もう此の小舎で飯を食ふのも之が最後になるのぢやないかしら。心配性の私は拂つてもく／＼斯んな不安が心にまつはりついて來る。午前四時、アイゼンを穿いてリュツクを肩に、きしむ雪を踏みしめて外に立つ。バットレスは黒々と聳え、無言のまゝ、私達を見下してゐる。幸ひ風も落ち、澄んだ月の光に昨日迄のラツセルの跡がおぼろに續いて、やがて池の向ふの葉の落ちた樺の木立をぬつて黒い林の中に入つてゐる。靜な夜である。ピツケルを抱えて歩き出す時、もう今迄の小心な氣持は影をひそめて、私達は唯、あの氷に岩に張り切つた登高慾に燃えて來る。林の中を電燈を頼りに歩いて行く時、踏み固めた雪路は雪の無い時より樂な位で、案外早く岩小屋へ來てしまふ。此邊で休憩して輪螺をつけた。見上げる北岳の頂上からは、うすいもやの様な霧が湧いては消え、湧いては消えてゐる。

「月に輪がかゝつてゐるぢやないか。」と、仰向く小林の手にしたピツケルが月光ににぶく光つてゐる。夢の様な光だ。私達は又無言で歩き出した。雪は嫌なグレーカブルクラストだが、數回のラツセルの後なので左程に苦痛は感じない。交互に先頭になつ

てゆつくり／＼と登つて行く。

十二月も半ばになれば日の出は目立つて遅くなる。もう出掛けから大分時間もたつたと思ふ頃にも、東の空には曉の氣配さへ見えない。然し氷壁の下迄行つて待つた方がいゝだらうと、私達はやがて大樺澤と別れてバットレスへの急な雪面にラッセルを續けて行つた。間もなく明の明星が輝いて藥師の向ふの空が心持ち白くなる。そして私達が第四尾根の直下でビスケツトをほうばる頃、ピンクに染まる峰々と共に、歡喜に満ちたさわやかな朝の光があたりの雪面に踊つて、夜の神祕から解放された私達の胸にもすが／＼しい空氣が飛び込んで来る。早速アンザイレンして氷壁だ。先づ小谷部が空身になつて先日來のステツプを掘り出し乍ら登る。ハーケンが朝の空氣に小氣味よい響をたて、氷に喰ひ込んで行く。續いて私が登り、荷を上げ、小林が登る。之を二回繰り返して六十米の氷壁が終つた。テラスに立つと(5)のガリーにつまつた雪が朝日にまぶしく輝いてゐる。然し雪崩は大丈夫らしい。これからが問題のトラバースなのだ。つまり私達はNo.3へさりつく唯一の路としてNo.1からのへつりを考へたのである。之がうまく行けばNo.3は六分通りの成功と云ふのが私達の始めからの考だつた。此處で小谷部小林私の順でアンザイレンしてトラバースにかゝる。急な逆層の岩に着いた雪に注意深くステツプを刻んで進むのだが、之が丁度真中邊で壁にぶつかるので、二本のハーケンと補助綱をたよりに五、六米下のバンドへ降りなければならぬ。此處が又一面の氷でバランスが相當必要だ。先づ二

人のジツヘルで小谷部が無事通過、下のバンドを渡つて向ふ側の樺迄行つて其處でジツヘルし、次に小林が渡る。最後に私が行くのだが、下のバンドへのアブザイレンが終つた時だつた、ふと右手が輕くなつたと思つた。たん、大事なビツケルが何の豫告も無しにスウツトと下へ落ちて行く。「仕舞つた。」と、思はず聲を出したが後の祭り。見れば何と云ふ事だ、ビツケルバンドが切れて手首に残つてゐる。斯な所でビツケルを落すなんて全く致命的である。私は思はず自分の準備の不注意を罵りたい氣になつた。然し最早どう仕様もない。私は手に残つたハンマーをたよりに登るより他に仕方は無いのである。

バンドのトラバースが終つて岳樺の生えた急斜面を登りきるとばつと前面が開けて、朝日の直射を受けたNo.3、No.4のリツヂが氷雪に輝いて競ふ様に突立つて見える。其處はNo.3下方のルンゼの末端である。トラバースに成功したのでかなりゆつくりした氣持になりパンをかちつたり、お茶を飲んだりした。幸ひ此の邊の雪もよく落着いてゐて下層とのなじみもいゝので、前に考へてゐた此のガリーの雪崩も先づ心配なさうである。九時五十分此處を出發して登高を續ける。相當深いラッセルを終つて尾根へは右側からさりついた。此の邊は傾斜は相當あるが拳で雪をたき割ると下方の這松が掴めるので、至極ヂツヘルに登る事が出来る。六月に直登した岩峰は時間を思つて左を搦んで簡単にリツヂへ出る。天氣は非常によく、風さへ無い。雪の状態から考へても私達は又さなないチャンスを掴んでしまつたものだ。左を見ると

燐寸箱の尾根が立派に見える。然しあれも右側を掬めばいゝバンドがあるし、第一ハーケンがよく効きさうだ。右には遙か下の方に大樺の池が見える。手鏡か何かの様だ。そして其の傍にほんちに豆の様に小舎がある。あそこから見ても馬鹿に急に見えるリッヂに、今自分等がくつゝいてゐるのだと思ふさおかしな氣がした。

更に登つて行くさやがてリッヂが廣くなる處がある。此處がちよつと惡かつた。之を過ぎると又少しラッセル。そして其の上が細い溝になつてゐて此の溝から右手の壁に出るのだが、此處が悪い。六月には左程に思はなかつたが今度は相當だつた。手袋の手で下向きのホールドをつまみ、アイセンの一本のツアツケに全體重をかけてトラバース氣味に登るので、相當緊張してしまふ。之を越すと岩に小さな這松の混つた非常な急傾斜になるが、然し此處はホールドがあるからいゝ。下を見るさあの大きな大樺澤が足の間に小さく見える。それよりも此のバットレスの大觀が素晴らしい。No.3 No.4を中心に幾つもの砲臺の様な岩稜が、氷に輝く逆層の壁を有つて大波の様に上り上つてゐる。全く典型的なバットレスださつくぐ感心してしまつた。仰げばもう頂上も近い。尙もジッヘルしつゝ、登高を続けると間もなく東北尾根に合する處へ来る。此處から先はもう傾斜もゆるく、又ラセツルになる。主陵も直きだ。私達は胸をわく／＼させながらザイルを引きづつて登つて行つた。間もなく夏道へ出る。其處からは走る様に歩いて、二時三十分頂上へついたのでつた。

嬉しかつた。嬉しかつたのだと思ふ。それから一ヶ月も立つた

今日、私にはあの時の氣持をうまく表現する事は非常に難しい。あの時は私達はケルンを圍んで唯茫然としてゐた。想像してゐた感激さか、歡喜さか云ふものは凡そ似てもつかない様な氣持だつたから。唯「やるべき事をやつた。」「やれてしまつた。」さ云ふ風にしか思はれなかつた。私達は三人、風陰の雪の上に腰を下して間の岳へ續く大きな尾根を眺めながら、黙つて残つたパンをかちつてゐたのだつた。(一九三六、一、二一)

山岳部報告

記録 (昭和十年十二月—十一年一月)

- (1) 大岳山、海澤下り (一二、一) 小谷部、小林、高原
- (2) 八方尾根スキー行 (一二、七—九) 森脇、塚本
降雨の爲黒菱スキー小屋附近にて練習したのみ。
- (3) 北岳バットレス登攀 (一二、七—一六) 小谷部、小林、鷺野、一二、七 (甲府—芦安村—五葉尾根小屋)。一二、八 (五葉小屋—シレイ澤岩小屋)。一二、九 (岩小屋—大樺小屋、此處に滞在す)。一二、一〇 (バットレス偵察。第五ガリイ下方の氷壁にステツプを刻む)。一二、一一 (第五ガリイより第三尾根へのトラヴァース工作、及び第五ガリイ完登)。一二、一二 (休養)。一二、一三 (第五ガリイより第三尾根へのトラヴァースを完了し第三尾根完登)。一二、一四 (休養)。一二、一五 (大樺小

屋——鳳凰山——北御室。一二、一六(北御室——葦崎、歸京)

(4) 岩原スキー行(一二、一五) 柿原、岩崎

(5) 乗鞍岳スキー合宿(於乗鞍岳スキー小屋、一二、廿一—三〇)
参加者(小谷部、望月、森脇、和田、塚本、鷹野、佐々木、榎本、新羅、松浦、岩崎、大塚、齋藤(明)、他部員外二名、合計十五名)

此度の合宿は一般参加と云ふ事を第一とせず、部員のための技術の修練に重きを置いた。近來スキーは非常に流行し山岳部の合宿に参加しないでも一般學生は自由に出掛けられるが如き状態になつた爲である。かゝる目的での今回の合宿は充分成績が上り合せて新人の冬山に親しみ得た事は一つの收穫であつた。今後とも勿論合宿はかゝる傾向を辿るであらう。

(6) 西穂高、前穂高北尾根(一二、二八——一、三) 小谷部、鷹野、望月、一二、二八(乗鞍スキー合宿——澤渡)。一二、二九(澤渡——上高地五千尺)。一二、三〇(岳川谷、西穂高澤右保より西穂高第二峰登頂)。一二、三一(小谷部、鷹野は德澤へ、望月中の湯を経て下山)。一、一(奥又白谷より北尾根を経て前穂高登頂)。一、二(德澤——德本峠——松本) 一、三(歸京)
(7) 志賀高原、鹿澤、岩原スキー行(一、三——一六) 森脇、塚本、松浦。

(8) 野澤スキー練習(一、三——一六) 柿原、小林、他四名

(9) 北海道のスキー場へ(休暇中) 鷺崎

(10) 木曾御嶽(一、九——一、一二) 小谷部

(11) 岩原スキー行(一、一二) 佐々木、岩崎

(12) 赤城山スキー行(一、一九) 佐々木、岩崎

(13) 富士山スキー行(一、二五—二六) 小谷部、新羅、松浦

日誌 (十二月——一日)

○冬季スキー合宿準備會 十二月二日(月) 於小平部室。出席部員(本科六名、豫科十一名)

乗鞍岳スキー合宿に關し具體的相談、新人への注意等をなす。

○豫科山岳部主催山岳寫眞展覽會 十二月五、六、七の三日於小平會議室

冬山、スキーのシーズンを前にして豫科に於て寫眞展を開催す。

一般學生にも中々好評を拍す。七日の午後は先輩近藤氏御土産御持参にて來場さる。當日の出席部員、本科三名、豫科九名

○定期部員集會 十二月九日(月) 於國立部室

出席部員(本科三名、豫科八名)

○冬山懇談會 一月十三日(月) 於國立部室

出席部員(本科六名、豫科五名、專門部三名)

昭和十一年最初の集會日。皆雪焼けの顔をかゞやかし乍ら集ひ暖いストーブをかこんで眞暗になる迄、寫眞等を見せあつて冬山の思ひ出に耽る。

○卒業部員送別會 一月十七日(金) 午後六時より於新宿オリムピック

本年度卒業部員（齋藤正治、小柳二郎、鷹野雄一）
 殘留部員出席者（本科七名、豫科六名、專門部二名）

例年の通り送別會は何さなく淋しいもんだ。送らるゝ人々は部の進む可き道を示され、送る者も又確固たる信念を述べたりして、珍らしく緊張した送別會であつた。

○定期部員集會 一月廿日（月） 於國立部室

出席部員（本科三名、豫科三名、專門部二名）

學年試験が近づいた爲め出席者の少い事は遺憾である。春のスキー合宿及び山の事を内定す。

針葉樹會例會 十二月四日 於如水會館矢野記念館

出席者（會員）松木、村尾、矢作、吉澤、近藤、高橋、久

保田、増山、吉澤（松）、及吉澤一郎氏令妹

（部員）齋藤、林、柿原、小林、小谷部、望月、鷹

野、新羅、松浦、塚本、佐々木、榎本、森

川、原、岩崎。

針葉樹會忘年會 十二月廿四日 於元園軒

出席者（會員）中川、村尾、吉澤、近藤、磯野、久保田、

金田、手塚、高瀬、増山、吉澤（松）。

（部員）林。

針葉樹會例會 一月二十三日 於矢野記念館

出席者（會員）中川、村尾、矢作、吉澤、近藤、園山、増

山、吉澤（松）。

（部員）林、小谷部、望月、鷹野、新羅、松浦、佐々木、森川。

記 録

○岩原（初滑）（十二月二十二日）中川孫一

○鹿島鎗行 村尾金二、吉澤一郎、吉澤松次郎、他一名

十二月卅一日 松本驛着（前六・一六）——大町——梁場

着（前九・一〇）——黑澤峠（前一〇・一二

——二〇）——鹿島河原（一二・一〇——

四五）——小冷澤出合（後一・三〇——五

五）——西俣小倉（後二・五五）泊

一月一日 西俣小倉發（前七・一〇）——長ザク乗越

（一二・二〇）——冷池小倉（後一・三〇）天

候崩れ布引岳往復

一月二日 冷池小倉（前一〇・二〇）——長ザク乗越

（前一〇・五〇）雪降り始む——西俣小倉

（後一・四五）——三・二〇）村尾のみ泊る——

——小冷澤出合（後三・五八——四・一〇）——

——鹿島河原（四・一五）——鹿島部落（後

六・〇〇——六・三〇）馬橋を傭ふ——大

町（八・一五）——松本驛にて小谷部、鷹野

に會ひ淺間温泉泊

一月三日 松本驛發（前一〇・一九）歸京

○藏王山行 辛川稔一、鈴木英雄、増山清太郎

一月一日 夜上野發

一月二日 上ノ山驛——半郷——高湯柏屋泊り——

(午後見晴峠迄遊びに行く)

一月三日 高湯——コーホルドヒユツテ——お花島——

地藏岳——熊野岳——地藏岳——コーボ

ルドヒユツテ泊(往途ヒユツテ附近より、

吹雪。歸途時間を要してヒユツテリ)。

一月四日 ヒユツテ——高湯

一月五日 歸京(鈴木は北海道へ、増山は鳴子温泉へ

心地よく迎へられ、而も隣室は女流スキーヤー数名。だが斷つて置くが女流スキーヤーとは、中性もごちらかと云ふと男性に近きものである。驚いた。三日は九時過迄は天氣が良かったがコーホルドヒユツテを過ぎる頃からひどく吹雪き始めスプールが直ぐ消えてしまう。しかも歸途は猛烈な西風に悩まされヒユツテにたどり着いたのが五時過。ヒユツテ泊り。こゝで色々な人達と宿り合したが、以て針葉樹會員の龜鑑となすべきスキーヤー数名。寸時と雖もちつとしては居られない(らしい)。あれよくとみる間に味噌汁は出来るしテーブルの上には福神漬や山葵漬、ソーセージからベーコン。ついつり込まれて宿る丈の心算の僕達も夕食の御馳走になる。食事が終ると二本しか無い鋸のこり合ひをして薪を切る。いや驚いた。こんなのは針葉樹會員には居ないだらう。(トツ)

○地藏峠新鹿澤(一月三——四日) 中川孫一

○十勝岳行 鈴木英雄

一月八日 旭川(九・四〇〇)——上富良野(一一・〇〇〇)

——一二・〇〇〇——中茶屋(三・〇〇〇)——

吹上(五・〇〇〇)

一月九日 附近プロムナード

一月十日 雪濃霧、温泉(八・〇〇〇)——十勝岳頂上

(一一・三〇〇)直ちに引返したが風雪濃霧

の爲め悩まざる——噴火口(四・〇〇〇)——

四・三〇〇——温泉——(六・〇〇〇)

一月十一日 曇、温泉(二〇・〇〇〇)——上富良野(二・

〇〇——二・三〇〇——札幌(九・〇〇〇)

○飯士越(岩原から石打へ) 一月十九日 中川孫一

○赤城山(激しい風雪、雪はとても良い) 二月二日 中川孫一

○高尾山裏山(ハイキングコースとゲレンデが一所だから不

愉快な穴だらけと藪多く遂にスキーを折

る。 二月十一日 中川孫一

○石打(だだつ廣いばかりで面白くない) 二月三日 中川孫一

○霧ヶ峰(親湯——夫石峰——大門峠——車山——池のくる

み。車山北側の粉雪は素晴しかった。)

三月八日 中川孫一

會員消息

小川竹夫君

杉並區高圓寺六丁目七二二番地へ轉居